MUSEO GUGGENHEIM BILBAO XX ANIVERSARIO

開館20周年記念特集
ビルバオ・グッゲンハイム美術館

その外観はさながら、水面に浮かぶ銀色の巨大船のようだ。1997年に完成したビルバオ・グッゲンハイム美術館。開館当時、まさに時代の最先端をいく建築として絶賛され、この輝く巨大な「作品」に惹きつけられた、大勢の芸術愛好家が世界各国から殺到した。天才建築家フランク・O・ゲーリーの設計によって実現した、幾多もの銀の曲面壁が織りなす幻想的な美は、建立から20年が経った今なお「ビルバオ都市再生」の象徴として、光を放っている。

© FMGB Guggenheim Bilbao Museoa

Renovación urbana post industrial

渡部哲郎=文
TEXTO=TETSURO WATABE

ポスト工業都市の再生

筆者がビルバオ・グッゲンハイム美術館の川向こうにある大学に学んだ当時、工場跡地に放置された資材置き場、茶色に淀んだ川面がネルビオン川ウォーターフロント開発以前の印象風景だ。

1990年代初めビルバオ市はヨーロッパ連合（EU）が推進する「サステイナブル・シティ」構想に参画、「経済（開発）か環境か」ではなく、双方の同時再生に挑戦した。ポスト工業都市の再生、鉄の街を文化の街に変えるために、川辺の空間が変わる。その「目玉」が美術館誘致だった。

1991年4月バスク州首相は州都ビトリアにニューヨーク・グッゲンハイム財団の責任者を招いた。その場でバスク側は「目玉」の必要性を訴えて準備金2000万ドルを財団に寄付した。財団ディレクターであるトーマス・クレンスは回想インタビューで「バスク人に魅せられてしまった」、「ビルバオは（危機を克服しようとする）強い都市だ」と答えた。郊外の飛行場からヘリ機でビトリアに向かい、その後同じヘリで古都ゲルニカへ飛び、そこから2キロ離れたフォルア村にある「カセリオ」（バスク風家屋レストラン）でさらなる説明を受ける間、「前衛」美術館と「古臭い」バスクとのミスマッチへの「賭け」が思い浮かんだ、という。

グッゲンハイム効果

1997年10月、美術館は開館した。フランク・O・ゲーリーが設計したチタン製の鱗で全面が被われた巨大な鯨（バスクは西洋式捕鯨の発祥地）を想像させる建築物は評判となり、初年度に130万人強、その後も100万人前後の入館者があった。集客が期待できるピカソの「ゲルニカ」誘致には失敗したが、予想以上の数字は合意時の投入資金2000万ドルを2年で回収させた。経済復興を考えて宣伝した「グッゲンハイム効果」の文句が現実になった。美術館はビルバオ市のみならず、バスク全体、そして都市再生の「シンボル」となった。ビルバオ「衰退」を物語る高い失業率30％が3％台に。

美術館は「鯨」、国際会議場メイン・ホールは「造船所のドック」、川に架かる橋は「ガラスの下に透きとおる川面」を見せる。やがて磯崎新設計による「ツインタワー」のゲートが登場した。「鯨」、「造船所」に続く、ゲートの解釈をめぐる会話はキリスト教「マリア信仰」に及んだ。彼の地は、古代信仰の女神「アンドラ・マリ」と「聖母マリア」が融合して祖先礼拝が強いカトリックが根付いた。バスクの伝統が現代に創生される。美術館周辺の変容が話題を呼ぶ。20年間周辺の進化を促す「目玉」がこの美術館だ。

渡部 哲郎 Tetsuro Watabe / 横浜商科大学教授
1950年島根県安来市生まれ。島根大学文理学部卒業、デウスト大学文哲学部留学、上智大学大学院文学研究科博士課程修了。常葉学園大学外国部学部助教授、デウスト大学客員教授、横浜商科大学商学部教授。著書に『バスク　もう一つのスペイン』（単著）、『新スペイン内戦史』（共著）、『新訂増補スペイン・ポルトガルを知る事典』（共編著）、『バスクとバスク人』（単著）など。

表面はチタンの鱗で覆われており、巨大な鯨を連想させる。古くから漁業が盛んなバスクにふさわしいデザインだ。

MUSEO GUGGENHEIM BILBAO XX ANIVERSARIO

Palacio Euskalduna de Congresos y de la Música
エウスカルドゥナ国際会議場・コンサートホール

GGENHEIM

Torre Iberdrola
イベルドローラ・タワー

La ría del Nervión de Bilbao
ネルビオン川

夜にはライトアップされ、ネルビオン川河畔に幻想的な風景が広がる。

MUSEO GUGGENHEIM BILBAO XX ANIVERSARIO

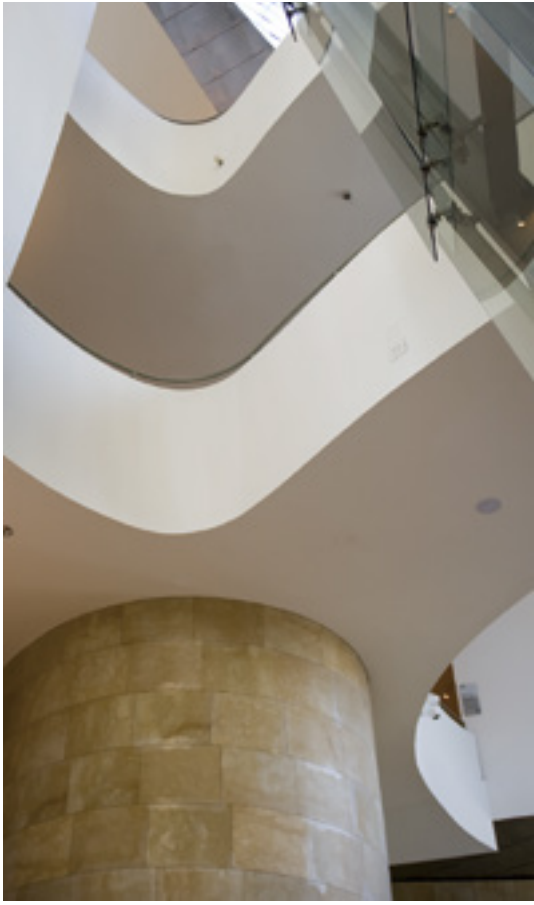
EDIFICIO

美術館に隣接するサルベ橋。印象的な赤色のゲートは、美術館が開館10周年を迎えた2007年、フランス人アーティストのダニエル・ビュランによって増築された。

グッゲンハイム美術館の展開

1847年、故郷スイスから一人のユダヤ人移民がトランク一つでアメリカ合衆国へと渡った。彼の名はマイヤー・グッゲンハイム。一人の行商人でしかなかった人物が、多くの運に恵まれたことで富を増やし、晩年には世界中の鉱山の大半の所有者となっていた。その息子ソロモンは、富豪の娘と結婚したことでさらにその富を増やす。ソロモンは芸術への深い愛と情熱を持っていたため、その後の人生で、彼は自身のもつ莫大な資産を、数多くの美術品を収集することに費やした。最初は身の回りに飾っていた芸術品も、数が増えるにつれて飾るところがなくなり、1937年、彼は自分の名を冠した財団をつくる決意をする。その目的は自分のコレクションを展示するための美術館をつくることであった。

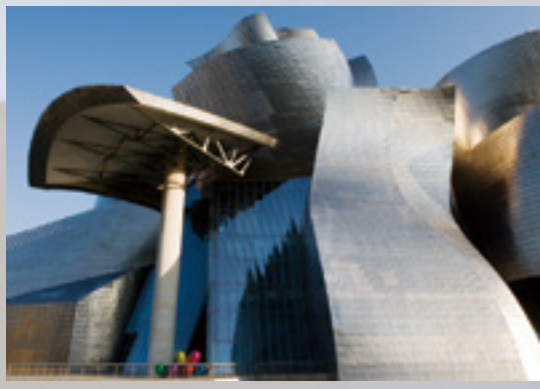
その2年後、ニューヨークに史上初めての抽象画美術館が生まれる。以降、財団は世界各地に「グッゲンハイム美術館」の名を持つ分館を展開し、近現代美術の発展普及に大いに寄与したのである。



館内の様子。外観と同じく曲線が多用され、
複雑で有機的な空間を生み出している。

ビルバオのグッゲンハイム美術館は1997年に落成式が行われた。そのわずか4年ばかり後に、欧州連合の単一通過ユーロ導入のセレモニーで、テレビはヨーロッパを代表する著名な建物と並んで、グッゲンハイム美術館の姿を中継した。ほんの短い間に、フランク・O・ゲーリーの作品はビルバオのシンボルであるだけでなく、スペインで最も多くの人々が訪れる美術館の一つになっていた。10年ほど前、美術館の建設計画が練られ始めたとき、誰がビルバオの大成功を予想しただろうか。

オープンから1年の秋には、入館者数136万人を記録した。その2年後の2000年には、350万人に達していた。開館前の予想をはるかに上回る「グッゲンハイム効果」は人々を驚愕させた。グッゲンハイム美術館ができたことによって、多くの観光客がビルバオを訪れるようになった。ビルバオ・グッゲンハイムの成功は本当に並はずれたものであり、経済的効果をもたらしただけでなく、多大な文化的、芸術的価値をバスクの土地にもたらしたのである。



p8-p9 文・ハビエル・マルティネス（京都外国語大学名誉教授）
川成洋(編集), 坂東省次 (編集)『スペイン文化事典』丸善出版(2011), pp.150-151.

①

②

MUSEO GUGGENHEIM BILBAO XX ANIVERSARIO

COLECCIÓN

③

館外の作品

①ジェフ・クーンズ《チューリップ》1995–2004年。派手な風船のようにも見える、ステンレス鋼の作品。背後には茎が伸びている。

②アニッシュ・カプーア《Tall Tree and the Eye》2009年。球体の鏡面には対岸の景色が映り込む。

③ルイーズ・ブルジョワ《ママン》1999年。ブロンズの巨大な蜘蛛のオブジェ。六本木ヒルズにも展示されている。

④ジェフ・クーンズ《バビー》1992年。美術館入口に展示。四季折々、鮮やかな花々が咲き誇る。

④

リチャード・セラ《時間の問題》1994–2005年。鉄板彫刻が並ぶ。
左隅の椅子と比較すればわかるように、超大型の作品。

ジャン＝ミシェル・バスキア《ナポリから来た男》1982年。落書きのような作風。
赤いロバの頭上に「THE MAN FROM NAPLES」と書かれている。

「母の部屋」と呼ばれる、イタリア人アーティスト、
フランチェスコ・クレメントの展示室。

MUSEO GUGGENHEIM BILBAO

住所：Avenida Abandoibarra 2
48001 Bilbao, Bizkaia (País Vasco)
+34 944 35 90 23
informacion@guggenheim-bilbao.eus
URL www.guggenheim-bilbao.es

◆入館料／大人：16 €、シニア（年金受給者）：9€、学生（26歳以下）9 €、子ども・美術館友の会メンバー：無料◆チケットの窓口販売／火曜日～日曜日　10:00～20:00

Arquitecto **Frank Owen Gehry**

ロサンゼルスを本拠地として活躍する、カナダ出身の建築家。脱構築主義建築の旗手として知られる。1989年には建築界のノーベル賞と呼ばれるプリツカー賞を受賞。ビルバオ・グッゲンハイム美術館は彼の史上最高傑作の一つとされる。ゲーリーはこのプロジェクトに関わる中で、バスクを深く愛し、また現地の人々や建設会社の力量や技術を高く評価している。「バスク人のプロ精神や建物に用いた技巧は、私が世界中で見てきたものを上回るレベルのものである。また、彼らは人間として、プロとしての誇りを持っている」。

ゲーリーの建築作品は、スペインには他に、バルセロナの「ビラ・オリンピカ」、エルシエゴの「マルケス・デ・リスカル」がある。日本にも神戸港に「フィッシュ・ダンス」という巨大な鯉のオブジェがある。

©Alexandra Cabri

MARQUÉS DE RISCAL
マルケス・デ・リスカル

スペイン北部リオハ地方、エルシエゴのワイナリー「マルケス・デ・リスカル」がワイナリーの敷地内に建てたホテル。金属の板をグニャリと踏みつけたような曲がった屋根は「ブドウの木」をイメージしている。屋根の色は、太陽の光によって変化し、ワインの色を表現している。本誌第26号の特集記事にて紹介。